

## Life Design Focus

# 地域における子どもへの声かけの現状 —「ライフデザイン白書2015」より—

第一生命経済研究所 ライフデザイン研究本部 研究開発室 宮木 由貴子

道端で困っている様子の子どものみかけるとき、私たちはどのように感じるだろうか。その子どもが明らかに助けを必要としていると感じたとき、迷い無く声をかけることができるだろうか。本稿では、地域における子どもへの声かけについて考える。

### <困っている他人などへの対応>

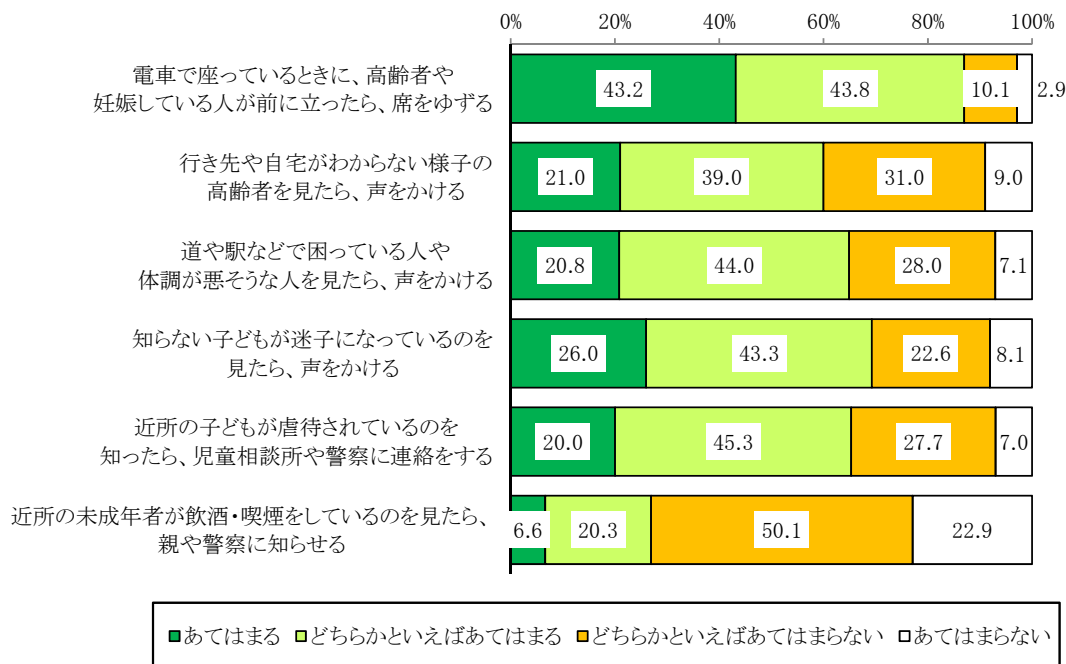
「今後の生活に関するアンケート」\*<sup>注</sup>では、困っている他人などへの対応として、「電車で座っているときに、高齢者や妊娠している人が前に立ったら、席をゆずる」「行き先や自宅がわからない様子的高齢者を見たら、声をかける」「道や駅などで困っている人や体調が悪そうな人を見たら、声をかける」「知らない子どもが迷子になっているのを見たら、声をかける」「近所の子どもが虐待されているのを知ったら、児童相談所や警察に連絡をする」「近所の未成年者が飲酒・喫煙をしているのを見たら、親や警察に知らせる」の6項目について調査した。

全体的な傾向についてみると、「電車で座っているときに、高齢者や妊娠している人が前に立ったら、席をゆずる」についてあてはまる（「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の合計、以下同じ）とした割合は87.0%と9割近くに及んだ(図表1)。

また、「行き先や自宅がわからない様子的高齢者を見たら、声をかける」「道や駅などで困っている人や体調が悪そうな人を見たら、声をかける」「知らない子どもが迷子になっているのを見たら、声をかける」「近所の子どもが虐待されているのを知ったら、児童相談所や警察に連絡をする」の4項目について、あてはまるとした割合はそれぞれ60%台となっていた。

一方、「近所の未成年者が飲酒・喫煙をしているのを見たら、親や警察に知らせる」については、あてはまるとした割合が26.6%にとどまった。

図表1 困っている他人などへの対応



<子どもがいない40歳以下で他人に声かけをしない人が多い>

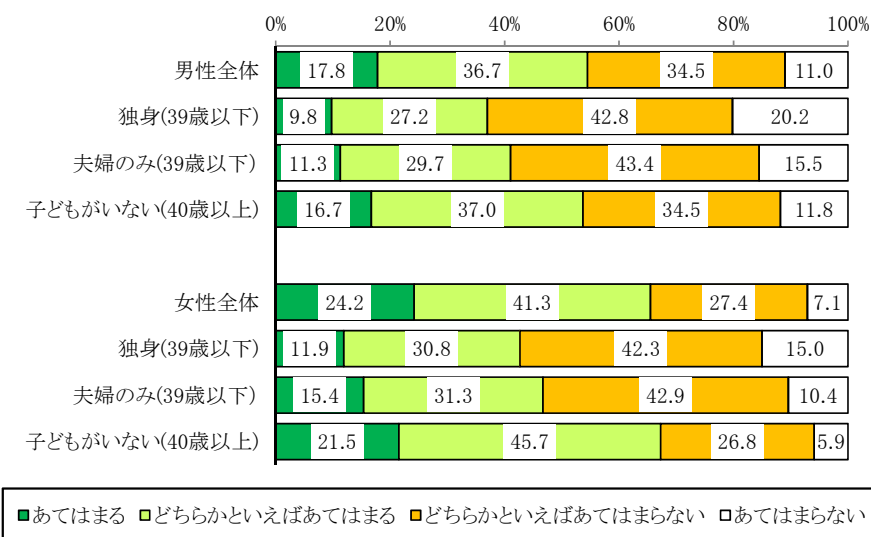
このうち、「声かけ」の3項目を、ライフステージ別にみると、男女ともに特に「独身（39歳以下）」「夫婦のみ」といった、子どもがいない人で相対的に行動を起こしている人が少なかった。子どもがいる人では、子どもを介して学校関係者や近所の人とコミュニケーションをとる機会が多いが、そうしたことが他人への声かけに対するハードルを低くしている側面があるのかもしれない。

例えば、「行き先や自宅がわからない様子的高齢者を見たら、声をかける」についてみると、男性の場合、全体で54.5%があてはまる（「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の合計、以下同じ）としているのに対し、「独身（39歳以下）」では37.0%、「夫婦のみ（39歳以下）」では41.0%にとどまっている（図表2）。

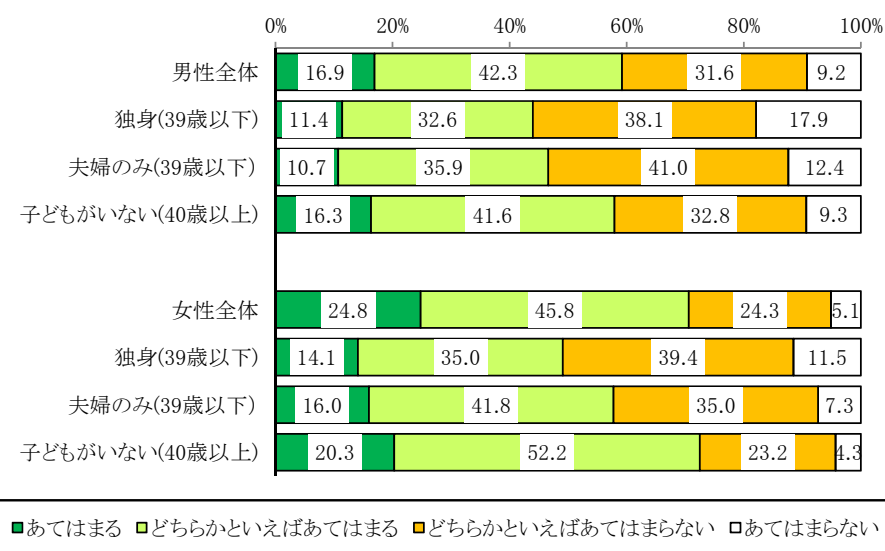
同じく女性についてみると、当てはまるとした人が全体で65.5%であるのに対し、「独身（39歳以下）」では42.7%、「夫婦のみ（39歳以下）」では46.7%となっていた。

また、「道や駅などで困っている人や体調が悪そうな人を見たら、声をかける」についても同様の傾向がみられており、男女ともに「独身（39歳以下）」と「夫婦のみ（39歳以下）」ではそれぞれの性別の平均を大きく下回っていた（図表3）。

図表2 行き先や自宅がわからない様子の高齢者を見たら、声をかける  
(性別、性・子どもがいないライフステージ別)



図表3 道や駅などで困っている人や体調が悪そうな人を見たら、声をかける  
(性別、性・子どもがいないライフステージ別)

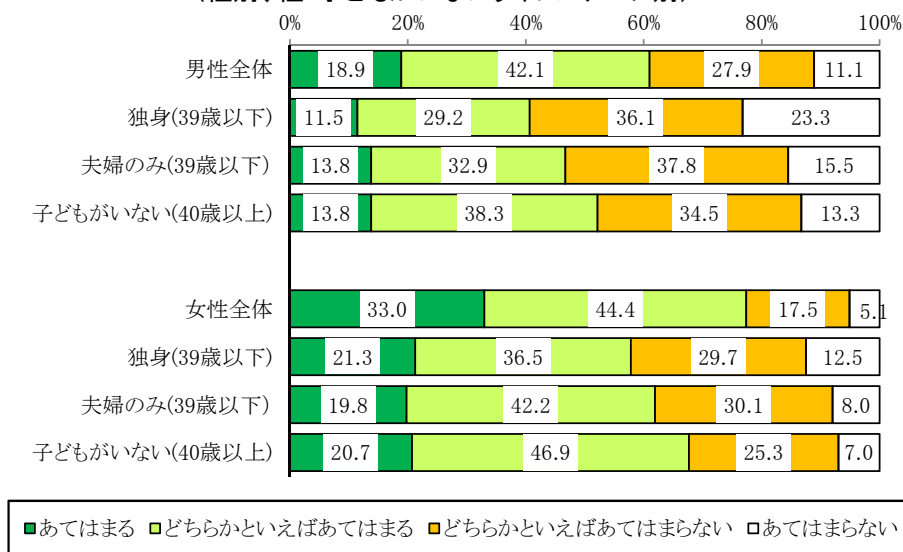


<迷子の子どもへの声かけは子どものいない人ではしにくい？>

これに対し、「知らない子どもが迷子になっているのを見たら、声をかける」については、やや異なる結果がみられた。男性の場合、あてはまるとした人が全体で61.0%であるのに対して、「独身(39歳以下)」で40.7%、「夫婦のみ(39歳以下)」で46.7%と低い傾向は先の2項目と変わらないが、「子どもがいない(40歳以上)」でも52.1%と平均をかなり下回っている(図表4)。女性についても同様で、全体であてはまるとした人が77.4%であるのに対し、「独身(39歳以下)」で57.8%、「夫婦のみ(39歳以下)」で62.0%、「子どもがいない(40歳以上)」で67.6%にとどまっていた。

図表4 知らない子どもが迷子になっているの見たら、声をかける

(性別、性・子どもがいないライフステージ別)



これら3つの項目の結果を一覧にし、全体との差をみたものが図表5である。「行き先や自宅がわからない様子の高齢者を見たら、声をかける」「道や駅などで困っている人や体調が悪そうな人を見たら、声をかける」については、「独身」「夫婦のみ(39歳以下)」の順で差が縮小し、「子どもがいない(40歳以上)」ではゼロに近くなるなど、年齢が高くなるほど声かけに抵抗がなくなる傾向があると考えられる。しかし、迷子の子どもへの声かけについてはある程度加齢の影響がみられるものの、他の2項目とは明らかに異なり、「子どもがいない(40歳以上)」において全体値と10ポイント前後の差がみられる。子どもがいない人には、迷子の子どもへの声かけに何らかの躊躇や抵抗があるものと推察される。

図表5 図表2・3・4で「あてはまる」とした人の数値(性、子どもがいないライフステージ別)

	性別	全体	独身(39歳以下)		夫婦のみ(39歳以下)		子どもがいない(40歳以上)	
			(%)	全体との差(ポイント)	(%)	全体との差(ポイント)	(%)	全体との差(ポイント)
行き先や自宅がわからない様子の高齢者を見たら、声をかける	男性	54.5	37.0	17.5	41.0	13.5	53.7	0.8
	女性	65.5	42.7	22.8	46.7	18.8	67.2	-1.7
道や駅などで困っている人や体調悪そうな人を見たら、声をかける	男性	59.2	44.4	14.8	46.3	12.9	57.9	1.3
	女性	70.6	49.1	21.5	57.8	12.8	72.5	-1.9
知らない子どもが迷子になっているの見たら、声をかける	男性	61.0	40.7	20.3	46.7	14.3	52.1	8.9
	女性	77.7	57.8	19.9	62.0	15.7	67.6	10.1

注:「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の合計

**<子どもへの声かけに躊躇する社会>**

以前、迷子の子どもが泣いているのに、不審者と間違えられるのが怖くて声をかけられなかった男性がネットで話題になった。これは決して珍しい話ではなく、子どもがいる・いないにかかわらず、多くの男性が共感する状況ではないだろうか。筆者も何度か道端で迷子の子どもを保護した経験があるが、自分が女性であり、自身にも子どもがいること、さらに居住地である程度顔が知られていることなどが、迷子の子どもへの声かけのハードルを低くしていることを実感する。

現在、子どもを持つ母親を中心に、居住地の自治体が配信する「地域の安心安全メール」に登録する人は少なくない。これは、事前に登録をしておくことで、携帯電話やスマートフォンに地域の安心安全情報が適宜配信されるシステムであり、不審者情報などが配信されることがある。このようなシステムは、子どもを持つ親に大きな安心を与える一方で、子どもへの声かけそのものに対する社会の見方にも影響をおよぼしており、見知らぬ男性が子どもに声をかけている姿は、今や周囲に疑いの目を持たれる傾向にある。無論、これらのメールは、状況的に不審者であるという判断が警察や学校側でなされた上での配信と思われるが、メールの内容だけを見る限り、不審者と誤認されることへの自衛の側面から、子どもへの声かけは極力避けたほうが無難であると感じざるを得ない配信事例は少なくない。

生涯未婚率が年々高くなり、子どもの数も減少する中で、地域の声かけはこれまでより一層少なくなっていくことだろう。「子どもへの声かけ」は、地域の安全を守る住民もこれまで行ってきたものである。子どもの安全に敏感になればなるほど、地域の「見守り力」が失われていく側面があるのは残念なことである。

(みやき ゆきこ 上席主任研究員)

**【参考データ】**

- ・第一生命保険株式会社 News Release

今どきの人は困っている他人などに手を差し伸べるのか

～『ライフデザイン白書 2015年』の調査より～

[http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2015/news1510\\_2.pdf](http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2015/news1510_2.pdf)

**【注】**

- ・本稿は、「ライフデザイン白書2015年」の元となった「今後の生活に関するアンケート」より、「困っている他人などへの対応」の結果に注目し分析を行ったものである。